# Talking Now '99

AMDA代表 菅波 茂さん

# パートナーシップの人間関係は人生を豊かにしてくれる

■1946年、広島県生まれ。76年、岡山大学医学部大学院（公衆衛生）修了。81年5月、岡山市内に菅波内科医院開業。84年AMDA（アジア医師連絡協議会）設立。AMDA代表、医療法人アスカ会理事長。著書に『遥かなる夢　国際医療貢献と地域おこし』、『ボランティアの時代』（共著）、『とび出せ！ AMDA』（編著）その他。

## アジアの医学生たちとの連携

――AMDAを立ちあげるまでの経緯をまずお聞きしたいのですが……。

**菅波**　私たちは一九七九年から毎年タイやビルマ（現ミャンマー）やインドなどに医療チームを派遣して調査をやっていたのですね。そうしているうち難民問題が起きて「欧米の若者はカンボジアあたりにどんどん集まってボランティア活動をやってるのに日本の若者はどうした」なんていうキャンペーンが出ました。

どこで何が必要とされているか、どこへ行けばどんなお手伝いをさせてもらえるかという、具体的な情報は一つもなかったのですが、それまでアジアに関わっていたので「何か役に立てるのではないか」と行ってみたのです。

でも行ってみたら、難民キャンプは国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と契約しなければ入れないとか、医療は医療NGOと契約するとか、そういう具体的なことは全然わからなかったです。どうにか交渉して難民キャンプに入ったら、日本のJICA派遣の医療チームが来ていたので「何かお手伝いしたい」と言うと「私たちは政府派遣なので、民間の人に何かあっても責任はとれないから」と丁寧に断られたのです。

だから善意だけでは何もできない、情報がな

かったり現地で一緒にやってくれる人がいないのは致命傷だと思いました。

それで、アジアの医学生たちと相互理解を深めていましたので、一九八四年にアジア医師連絡協議会というのをつくったわけで、それがAMDAです。

――組織はどのようになっているのですか。

**菅波**　支部は今二一か国にありますが、多分今年中に三〇か国くらいになると思います。日本は一五〇〇人で、だいたい二割くらいが医師か看護婦で、海外の四〇〇人はほとんど医者です。アジアを主体にアフリカや中南米、ボスニア・ヘルツェゴビナなどの政府に人道援助を行っていて、今コソボ難民のためAMDAアルバニア支部の立ち上げを急いでいるのです。

事務局は十二～十三人でボランティアが加わっていますが、賃金は一般企業の半分から三分の二くらいで、家族を抱えたら続けられないというのが、大きな悩みですね。

## 人道援助を日本の専売特許に

――医療を通しての人道援助で印象に残るエピソードをお聞かせください。

**菅波**　初めて緊急医療チームを派遣したのは、ミャンマーからの一九九一年のヒンギャ難民の救援です。このときは、UNHCRへ何度も許可の打診をしたのに、返事がきませんでした。それでしょうがないので、東京大学の大学院に留学中のバングラデシュのドクターを先頭にチームを組んで、バングラデシュに行ったのです。

母国が非常に困難なときに自分の国に留学生が帰るのに、UNHCRも文句を言わないだろうということでした。

そしたらバングラデシュ政府がものすごく喜んでくれまして、普通は三か月かかる手続きが一日でパスしちゃったのです。UNHCRは許可をくれなかったのに、バングラデシュ政府を通じて、難民対策委員会のトップの州知事が許可をくれて活動ができました。

そこで私たちが学んだのは、援助を受ける側にもプライドがあるということです。誰も好んで外国のチームを受け入れるのではなく、できたら自分の国で解決したいという気持ちがあります。

私たちは留学生のバングラデシュのドクターを先頭に行ったから、マスコミも熱烈歓迎でしたし、手続きもスピーディーにしてくれたのですね。今まで人道援助は欧米の専売特許のような感がありましたけど、実は違うなということを勉強しました。

それから阪神大震災で、日本のNGOが初めて国内的に認知を受けましたが、それまで海外でやっていた経験を生かして受け皿になれたわけで、このことは重要です。

一九九七年十二月にルワンダ難民救援にゴマへ行ったとき、私たちのチームが難民キャンプで襲われて、自衛隊を助けに呼びました。実際、自衛隊が重装備して保護しに来てくれて、安全を守ってくれたのですが、そのとき「なぜ自衛隊を呼んだのか」という愚かな声が出ましたね。国会でも「自衛隊の任務にないことをした」と責任を問われました。このような論議を聞かされていると、まだまだ日本人は観念的に世界を見ている人が多い、現場でたくさんの命がなくなっているのにと思います。

〝命は地球より重い〟という観念的な価値観、倫理観は日本人に共有されていますが、もっと日本は人道援助にたくさんの人とお金を使って現場へ行って、本当の命の重みを知ることが大事だと感じますし、それを国内でも生かしていった方がいいという気がしますね。

## 日本が尊敬されるチャンス

――湾岸戦争のとき、日本は一三〇億ドルという多額の援助をしましたが、終戦後、ニューヨークタイムズ紙などに載ったクウェートの謝辞広告に日本の名はありませんでしたね。

**菅波**　ええ、日本円で一兆四〇〇〇～五〇〇〇億円、日本のODAの一年分のお金を多国籍軍に贈りましたが、当事者のクウェートからは謝辞がありませんでした。しかしぼくらは税金で

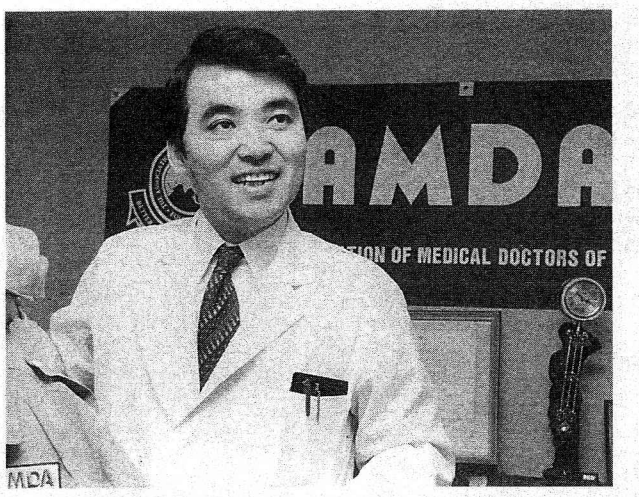


99年度日本陶芸展で文部大臣奨励賞を受賞した橋本さんに、作陶にまつわる苦労と喜びを聞く。

その分をいまだに払い続けています。この税金に対するアカウンタビリティーが全然ないというのは大きな問題ですね。

私があのとき思ったのは、人道援助を多国籍でやったらどうかということでした。日本とフィリピンとパキスタンが組んで医療チームを派遣するということです。中近東で尊敬されていてたくさんの医師を送り込んでいる国はパキスタンで、中近東のことは知り尽くしています。

そして中近東に出稼ぎすることで国の経済が成り立っているのが、フィリピンです。もし三国が組んで多国籍医師団で行けば、スポンサーは日本ですね。



熱っぽくAMDAの取り組みを講演集会で語る菅波さん

どんな医療が必要とされているかわかるのはパキスタンだから、現地で交渉するのはパキスタンで、現地の何万人ものフィリピン人も母国の医者が来ることで嬉しいでしょう。しかも三国の医者が一緒に働くことでパートナーシップが生まれます。

日本は尊敬される国になるすごいチャンスだったのです。そうなればクウェートも無視できませんから、感謝の意を表したと思います。アメリカが軍事を中心とした多国籍を組んだら、日本は医療という人道面での多国籍を組んで出していれば、状況は大きく変わっていただろうと思いますね。

今度のコソボ紛争では日本政府はこのときの教訓を生かしています。「戦費に対しては絶対出さないが、人道面では金を出す」と。もう一つは、今まで日本は国連機関に任意拠出金を出すだけでしたが、今回は政府ベースで自衛隊や国際緊急援助隊を出す代わりに、AMDAなどNGOを全面的に支援しようということでかなり多額のお金を出しているわけです。だから官民あげて協調路線で人道援助に貢献しようということです。

それから今まで税金に関しては、海外に出たものには会計検査院のチェックが入りませんでしたが、いまはODAに対してもチェックが入りますね。これからは国連機関への任意拠出金に対する使い道のチェックもきちっとやるべき時代ではないでしょうか。

――それは費用対効果を考えるためにも大事ですね。一方、お金をかけない援助を考えると、現地の風習や習慣を尊重しながら進めることは医療活動をする上からも大切でしょうね。

**菅波**　医療というのは文化でローカル性がものすごくあります。とくに宗教、冠婚葬祭、社会規範でそれぞれ独自のものがあり、現場現場で全部違います。AMDAはローカルイニシアチブを取っていますから、たとえばネパールで何か起こったら、AMDAネパールがイニシアチブを取って、他が支援するのです。

今度AMDAアルバニアが立ち上がれば、コソボに関してもアルバニアの価値観、やり方を一番重視して支援していこうと考えています。

また、どのレベルの医療が有効かというのも国によって違いますね。たとえばネパールに子ども病院を造っているのですが、その報告を見ると、下痢疾患が二五%、肺炎が二五%で、難民キャンプの状況と同じなのです。

病院に来る前のシステムが整備されていないから、急に皆病院へ駆け込んでくるということです。だから、この子ども病院をレベルの高い病院として作動させるためには、その前のヘルスポストとか公衆衛生教育や学校保健を充実さ

せて、防げる病気は全部防いでいかなければいけないと思っています。

## トラブルも共有する

――いま、AMDAでは若い人たちも積極的にボランティア活動しているようですね。

**菅波** 人間関係には、フレンドシップ、スポンサーシップ、パートナーシップの三つがあると思います。フレンドシップは基本的に「ありがとう」という言葉を持ち込まない、スポンサーシップは「ありがとう」が一方通行、パートナーシップは「ありがとう」が双方からです。

先生と生徒の関係はスポンサーシップですね。生徒は、いろんな知識や技術を教えてもらっている先生に「ありがとう」と言わなくてはいけませんが、先生は生徒に「ありがとう」と言う必要はないという考えです。

また利害ということから見ると、フレンドシップは利害関係を持ち込まない、スポンサーシップは利だけ共有、パートナーシップは害、つまりトラブルも共有することと言えます。

AMDAで高校生が最初集まったとき、学校間の交流がなかったから、フレンドシップもできていませんでした。ところがネパールの子ども病院の敷地内に障害児のための建物を造ろうということで、子どもたちが街頭募金を始めたのです。お互い恥ずかしそうにしながら呼びかけをやっていく中で、パートナーシップが育ってきたのです。苦労を共にしお互いの良さを認めていくことで、「ありがとう」とお互いに言えるようになり、学校間格差がなくなってしまいました。

今の学校教育はスポンサーシップも崩れかかっています。利害も何も共有しないフレンドシップの関係に変容しつつありますね。AMDAの高校生はパートナーシップの世界を共有することで、お互いの良さがわかってきたという成果があります。

今の世の中、できるだけ希薄な関係を目指していますが、人間というのはそれでは満足できなくてやはり、濃い人間関係を欲しているのも事実です。苦労を共にする経験をするかどうかで人間は変わるのですね。そういう意味で、AMDAは一つの場を提供できるということです。

これからもAMDAは人道援助の拠点として、日本が世界に発信していくための人材育成をやっていきたいと思っています。パートナーシップの人間関係は人生を豊かにしてくれるということで、「グローバルネットワーク・オブ・パートナーシップは人生の財産ですよ」とアピールしたいですね。

（取材・本誌編集部）


【史】

「つくる会」という運動がある。

平成12年―検定申請
平成13年―採　　択
平成14年―使用予定

**中学の新しい歴史・公民教科書がまもなく登場します。**

私たち「新しい歴史教科書をつくる会」では、ただいま中学校の歴史・公民分野の新しい歴史教科書を作成中です。

手にする一人ひとりが、歴史に連なる自分を感じられる日本人の物語。世界の中の日本を、品格をもっていきいきと描写した日本人の自画像。私たちは、そんな「新しい教科書」を子供たちに届けたいと願っています。

どうぞ、ご期待ください。

詳細ならびに入会案内
ご希望の方は、下記まで。

新しい歴史教科書をつくる会
会長　西尾幹二
〒113-0033
東京都文京区本郷2-36-9 西ビル1階
TEL.03-5800-8552　Fax.03-5804-8682